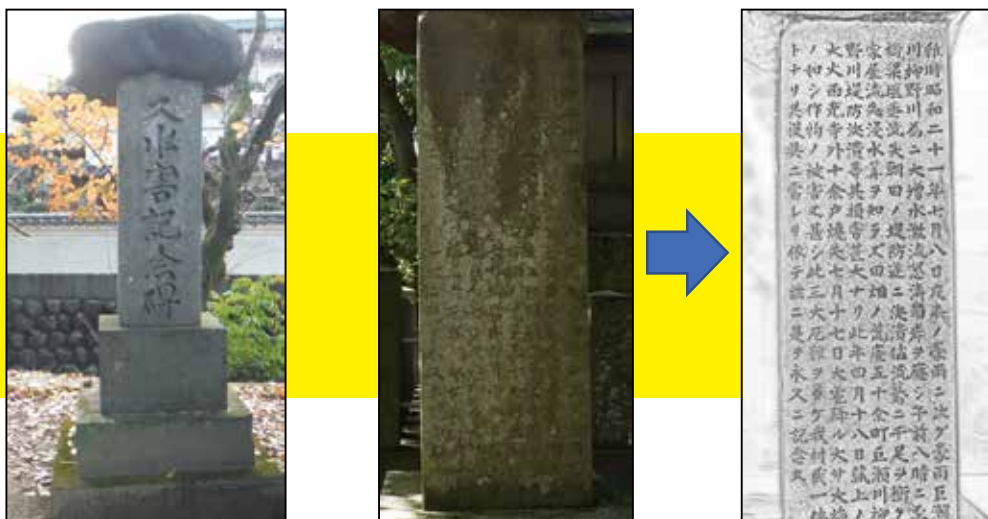


# 災害は歴史に学び 逃げ後れゼロ<sup>part</sup> 2

## — 石碑から学ぶ防災 —



### ひかり拓本技術で鮮明になった碑文のメッセージ

#### — 大水害記念碑(朝田天満宮) —

朝田天満宮内にひっそりと鎮座する大水害記念碑があります。その碑文は表面の摩耗で見えにくくなっていますが、ひかり拓本技術を使って鮮明なメッセージが蘇りました。碑文によると、昭和21年(1946)7月8日夜、それまでに降った豪雨で巨瀬川と柳野川(隈上川)が氾濫、堤防が決壊し、橋梁や家屋の流出、田畑の荒廃が起こりました。また、同年、西光寺などが大火に見舞われたこと、雹による作物被害があったことも記されています。戦後間もない混乱期に、三度の災難に見舞われた当時の人々の苦労が伺えます。このように、石碑には、今後起こりうる災害に備える大事なメッセージが隠れていることがあるので、防災に活かしていくことが極めて重要です。

この度、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 上相英之氏に來市頂き、上相氏が開発したひかり拓本技術を使って、風化しつつある災害石碑のメッセージを蘇らせ、今後の防災に役立てるための取り組みを実施しました。この冊子の作成にあたっては、九州大学助教の西山浩司先生と浮羽まるごと博物館協議会会長の佐藤好英先生に御指導頂きました。

# 碑文を蘇らせるひかり拓本技術

皆さんは、神社や道路脇などを歩いている際に古い石碑があることに気付くと思いますが、石碑にどんな意味があるのか考えたことはありますか？実際のところ、石碑は時代を経ると表面の摩耗やカビや苔の繁殖が進んで文字の判別ができなくなり、多くが忘れ去られる運命にあります。しかし、石碑には、当時の住民の苦勞が刻まれた、今日の我々にも通じる重要なメッセージが隠れているものが存在します。災害に関連する石碑も多く確認されており、復旧を記念するもの、犠牲者を慰霊するもの、災害の経験と教訓を次世代に伝えるものなどがあります。中には、メッセージの判読が難しく、伝承が途絶える恐れがある災害石碑もあります。そこで、風化しつつある災害石碑のメッセージを蘇らせ、また、現在読めるうちに鮮明化して次世代に記録を残す取り組みを実施しました。

石碑に記された碑文メッセージを蘇らせる技術として拓本（湿拓、乾拓など）があります。その方法の基本は、石碑の表面に紙を貼って、その上から墨とタンポを使って石碑に刻まれた文字を写しとります。しかし、従来の拓本は、時間も手間もかかり、文化財としての石碑を汚損する恐れがあります。そこで、従来の拓本とは異なる方法で石碑の文字を読み取るひかり拓本技術（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 上相英之氏の開発）を採用しました。その方法は、ライトを使って石碑の表面に光を当てて文字の影を作り、文字を浮き上がらせた状態で写真撮影するといった簡便なもので（下の写真）、その作業に関して、ライトの当たる角度を何度も変えながら繰り返し撮影します。最後に、解析ソフトを使って複数の画像を合成し、碑文の影だけを取り出して文字を判別できるようにします。この方法は、石碑を汚損することはなく、何より時間と手間を大幅に省くことができ、今後の碑文解読が飛躍的に進むことが期待されます。

この冊子では、ひかり拓本技術で蘇った先人たちのメッセージと地域の災害リスク情報を示すハザードマップを組み合わせ、地域特有の豪雨災害の危険性について考えてみることにします。

## ひかり拓本作業の様子



ひかり拓本データベース <https://takuhon.lab.irides.tohoku.ac.jp/>

写真提供：奈良文化財研究所 上相英之氏

# 石碑のメッセージ(妹川 元有地区)

## — 笹尾稲荷大神宮 六地藏 享保5年水害 —

妹川の笹尾地区にある笹尾稲荷大神宮内に、明和9年(1772)、国武利八によって建立された妹川六地藏の一つがあります。その台座にメッセージが記されています。既に、昭和61年(1986)、鎌水静夫氏によって拓本が行われましたが、あらためて、ひかり拓本技術を使って石碑の文字を解読しました。現在、風化や苔でメッセージの多くが読み取れませんが、ひかり拓本を使い下図の通り、読み解くことができました。碑文によると、享保5年(1720)6月に山汐(土石流の意味)で元蟻(元有)の民家が潰れて流されています。壊山物語(西見家文書)の妹川村の記述には、「死者は7名で、遺体の身元が誰なのかわからなかった。多くの人家は谷底にひっくり返り、家具や衣類はことごとく砂に埋もれ、田畑はすべて消えてなくなった」と記されています。その記述が元有のことを言っているのかは不明ですが、深刻な被害だったことは間違いありません。下図には示していませんが、碑文には新しい土地を開拓する農家の苦労が記され、地域の利益とともに、無病息災と農家の繁栄を願っています。

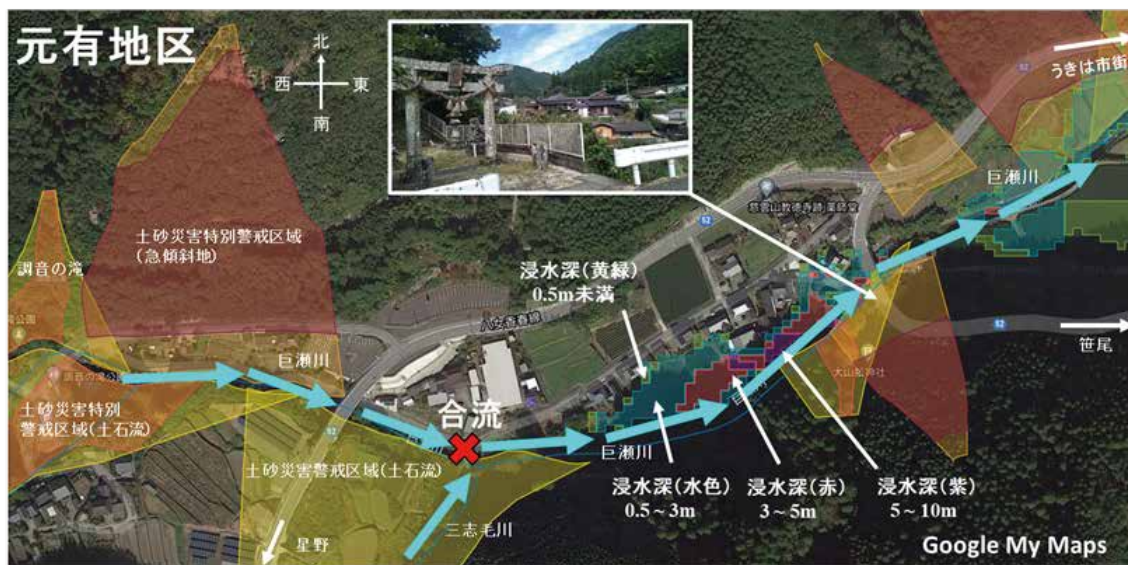
さて、この文章から読み取れる災害の特徴について考えてみましょう。次頁(3ページ)の元有地区のハザードマップを見てください。元有地区には巨瀬川が流れ、その周囲は山に囲まれています。巨瀬川が氾濫する際には、5.0m以上の浸水深が予想されている場所があります。氾濫がなくても、河川の側面が削られる洗堀(河岸浸食)の恐れがあり、家屋が流される危険もあります。さらに、周囲は土砂災害警戒区域となっており、土石流と崖崩れによる土砂災害にも注意する必要があります。享保5年の災害時には、巨瀬川本流とその支流の三志毛川に流れ込む谷で土石流が発生し、既に増水している両河川に土砂が流れ込んだのではないかと推測されます。その後両河川が元有集落の西側で合流して勢いを増し、増水と洗堀で家屋が流されたものと思われます。最近では、妹川地区は平成24年7月九州北部豪雨で被災しており、今後も同様の災害が起こる可能性があります。

### 笹尾六地藏



最後に元有地区の防災について考えてみましょう。元有地区は藤波ダムの上流域に位置しているため、巨瀬川の氾濫の影響を強く受けます。土砂災害の懸念もあり、災害時にはうきは市中心部に向かう道路が寸断されて、元有を含む妹川全体が孤立する恐れがあります。従って、豪雨が起る前に集落から離れるか、避難が難しい状況に備えて最も安全な緊急避難場所(集落内)を確保することが急務です。幸い、元有地区を含む妹川は、防災意識が高く、これまでも防災街歩き、防災マップ制作、避難訓練など地域ぐるみで積極的に防災に関わっています。このような地域の取り組みが災害時の適切な行動に繋がっていくと期待されます。

## 妹川地区元有の土砂災害と洪水の危険性



地図データ：Google, 地図データ©2022画像2022,Airbus, CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com

### 元有の住民の方々に防災街歩き



### 防災マップ作りの様子



### 完成した元有の防災マップ



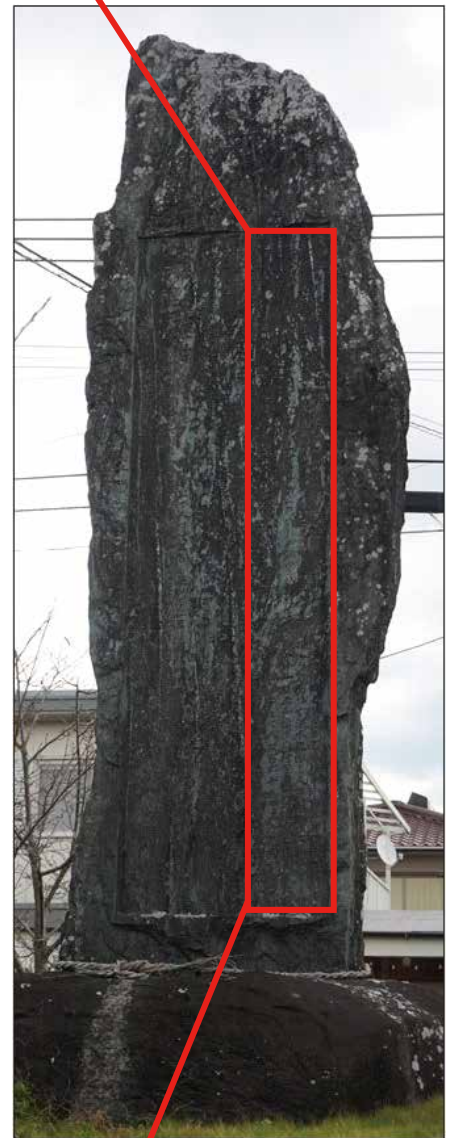
# 石碑のメッセージ(清瀬 大村地区)

## —大村復興碑 享保5年水害—

清瀬の大村地区にある大村天満宮内に縦長の大きな石碑があります。これは昭和7年(1932)に建立された大村復興碑です。現在は、建立から90年が経過して黒ずみ、文字が判別しにくくなっています。文字が小さいため石碑上部の碑文は全く確認できません。そこでひかり拓本を行ってみると、下図のように文字が鮮明に浮かび上がってきました。碑文によると、妹川の石碑と同じ享保5年(1720)の豪雨災害について記されています。大村地区に関する記述を見ると、旧暦6月19日から21日まで豪雨になり、「我が大村は最後の21日正午頃、流川村字深迫の山崩れによって押しつぶされ、地面はすべて石川原の砂漠となり・・・」と記され、村は跡形がなくなり、土砂(深さ60~90cm程度)に埋まってしまったと記載されています。その後も豪雨による増水があると巨瀬川は堆積した土砂の影響で氾濫し、何度も大村は被害を受けました。そのため、村の再建に長い年月がかかりましたが何とか復興を遂げました。そのことを「我等の祖先は困難にくじけることなく、長い年月にわたって金や物資の不足に苦しみながら、多くの困難を排して、遂に復興事業を完成した」と表現しています。碑文の最後に、「災害が発生した太陽暦の7月26日を記念日と定め、毎年、記念碑の前で祭りを厳かに行き、祖先の恩に報いるべきことを子孫に残すため、みんなで相談してこの碑を建てた」と記されていることから、災害の記憶、苦難の歴史、災害からの復興を後世に伝えるために建立されたことが分かります。



大村復興碑



大村天満宮内

次に、旧暦6月21日にどんなことが起きたのか考えてみましょう。右図の浸水ハザードマップ、そして、北側から立体的に見た下図を見て下さい。大村の南側に本佛寺がありますが、その東側の深迫谷が崩れて土石流となり、大量の水が土砂とともに巨瀬川に流れ込んだものと思われます。その土砂が巨瀬川の流れを塞ぐことで流れが変わり、大村の方向に流れ込んだものと推測されます。

最後に大村地区の防災について考えてみましょう。右図に示すように、大村地区は、巨瀬川の氾濫によって、0.5~3.0mの浸水深、つまり、家屋の1階部分が水没する恐れがあります。仮に巨瀬川が氾濫しなくても、享保5年の災害のように深迫谷で土石流が起こると、その土砂が巨瀬川を堰き止める恐れがあります。巨瀬川の水は上流からどんどん供給されるので、その圧力で堆積した土砂が決壊するか、流路が変わって大村に被害をもたらす恐れがあります。

歴史的に見ると、吉井町誌(昭和52年、第一巻)の山汐物語にあるように、深迫谷では土石流が繰り返し起こっています。実際、昭和21年と28年に、享保5年同様に深迫谷の土石流が発生し、巨瀬川の堤防が決壊しています。従って、大村地区では、豪雨が起る際、巨瀬川の水位だけでなく、深迫谷の土石流の発生にも注意を払って防災対策を考える必要があります。

享保5年旧暦6月21日 大村大洪水



地図データ：Google, 地図データ©2022画像2022, Airbus, CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com

享保5年旧暦6月21日 大村大洪水(北側から立体的に見る)



地図データ：Google, Image Landsat / Copernicus, Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO, Image ©2021 TerraMetrics

Google Earth

# 石碑のメッセージ(富永 西屋形地区)

## —山潮記念碑 昭和21年土石流—

### 西屋形地区の山潮記念碑



石碑西面

石碑南面

石碑北面

富永の西屋形地区、西屋形公民館の前に、昭和22年(1947)に建立された山潮記念碑があります。ひかり拓本で明瞭になった碑文(上図)には、昭和21年7月8日に発生した土石流災害の特徴や被害状況が克明に記されています。碑文の内容を解明すると、当時の土石流による大谷川の氾濫の様子は次頁(7ページ)の図のようになります。当日未明からの豪雨で午前8時頃、大谷川上流域にある妙見西城跡(室町～戦国期の山城遺構)の北面と地元の方に案内して頂いた地点(小字にもない地名:当時の籠野?)の山崩れで土石流が発生し、土砂・巨石・流木が西屋形地区を襲いました。地区の南側で濁流が2つに分かれて、一方が野口、西八反田、もう一方が原(上法華)、珍敷塚に流れ込み、県道151号線の北側まで達しました。屋形地区では幸い犠牲者は出なかったものの、田畑・道路・用水路・家屋、そして、地区を流れる大谷川が土砂で埋没しました。この碑文の最後に、「この機会に子孫に対して一言遺す。子孫は、先人の不屈の愛郷心を受け継ぎ、あらかじめ不測の事態に備え、困難に対処する覚悟を忘れるな。」と締めくくり、後世の人々に対して、土石流に対する備えを強く訴えるメッセージを残しています。

歴史的に見ると、西屋形地区は江戸時代の享保5年(1720)と享和2年(1802)に土石流による災害の記録があります。壊山物語(西見家文書)によると、享保5年旧暦6月21日には、死者10名を出す大惨事で、古文書の文章表現から、遺体の損傷が激しく、現在で言うDNA鑑定をしないと身元がわからないほどだったと推測されます。当時の屋形村は、石、砂、流木に覆われ、土砂が3～6mも堆積し、田畑、家屋が埋没しました。安否を確かめるために訪ねてきた人は、家財道具の散乱している中で、どこを掘ればよいかもわからなかったと記されています。それから82年後の享和2年旧暦6月1日、久留米市の古文書集「筑後旧家記録」に収められた年代記(塩足村庄屋記録)によると、耳納山麓の山本郡上泉・中泉・下泉村から流川村にかけて土石流が発生し、屋形村でも田畑が埋もれる被害が出ています。その後も田畑の荒廃が続き、50年近く回復していないことが記録されています(廻村書留)。このように、山潮記念碑がある西屋形は、歴史的に見ても土石流災害が繰り返し起こる地区だと認識する必要があります。

# 昭和21年7月8日 西屋形地区 土石流



最後に西屋形地区の防災について考えてみましょう。この地区は、土砂災害警戒地域に指定されており、大谷川上流域の山崩れに伴う土石流の発生が懸念されています。昭和21年災害時には、大谷川の氾濫・埋没、田畑埋没や家屋の破壊に見舞われ、影響は県道151号線の北側まで達しています。県道の北側には「崩岸」、「上水洗」などの小字地名が残されており、被害の想定範囲が県道の北側にも広がる恐れがあることに注意が必要です。時代を遡ると享和2年にも土石流により現在の県道の北側まで土砂が押し寄せています。

砂防堰堤が整備されていても、今後は地球温暖化に伴って想定を超える豪雨が発生する可能性を考え、土石流に対する避難対策を考える必要があります。豪雨時には、雨が弱いうちに集落から離れるか、地区内の少しでも高台で、大谷川から離れた安全な緊急避難場所を確保することが大切です。

## 土砂崩壊推定地点



地図データ：Google, Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO  
Image Landsat / Copernicus, Image ©2022 TerraMetrics



# 昭和28年大水害の記録

筑後川流域で甚大な被害をもたらした水害として、九州全域で999人の死者・行方不明者を出した昭和28年大水害は記憶に刻まれているのではないのでしょうか。うきは市では、昭和28年（1953）6月26日に巨瀬川の氾濫だけでなく、筑後川の氾濫・決壊も加わり、市内各所で中小河川の氾濫・決壊が相次ぎました。市内の広い範囲が浸水し死者7名、家屋流失162棟、家屋全半壊419棟、負傷者965名、床上・床下浸水6500棟の大きな災害となりました。

ここでは、江南校区の水害復興碑（昭和33年建立）の碑文を紹介します。碑文によると、25日から降り出した雨量が26日には500mmに達し、巨瀬川と美津留川が氾濫・決壊しました。その後、市内各所の橋梁の流出、大石水道と長野水道の崩壊、筑後川に架かる恵蘇宿橋の流出、中島堤防の500m決壊と続きます。その影響で、江南村では300棟の床上浸水が起こり、全耕地の3割が荒廃したと記されています。その後、住民は復興に立ち上がり、多くの苦難を経て、「一望砂漠の如き被災地は再び肥沃なる美田に還り、豊穡の稔りを見るに至る」と記されています。災害から69年を経て、災害の記憶が薄れつつある中で、このような石碑のメッセージは、将来再来すると思われる災害をイメージすることに大いに役立ってくれます。現在のハザードマップでは、筑後川、巨瀬川が氾濫した際、江南小学校周辺で0.5~3.0mの浸水、筑後川に隣接する地区では、家屋の2階まで達する3.0~5.0mの浸水が予想されています。そうなれば、石碑に記されたことが起こると考え、家族単位、地域単位で普段から災害に備え、いつでも避難できるようにしましょう。

最後に、被災当時と現在の様子を写真で比較してみました。ここで紹介した場所を次頁（9ページ）に、現在と災害時の写真を10、11ページに示しました。現在の写真を見ても洪水を連想することができませんが、当時の写真からは甚大な浸水被害の様子が伺えます。特に、美津留橋から見た風景（写真5・6）では完全に海のようになっています。大石小学校も川の濁流の中に浮いているように見え、校舎が完全に孤立しています（写真8）。これらの写真の撮影場所は、現在のハザードマップで見ると筑後川や巨瀬川の氾濫によって浸水することが予想されており、大石小学校付近や恵蘇宿橋付近では2階まで浸水する恐れがあります。この写真を見て、筑後川と巨瀬川の氾濫時には何が起こるかイメージできたと思います。ぜひ、今後の防災に役立ててください。

## 江南地区の水害復興碑

うきは市洪水ハザードマップ



## 写真撮影場所と洪水ハザードマップ



10、11ページの写真は、昭和28年浮羽郡水害誌（昭和29年刊行）に掲載されている写真です。下記に写真撮影をした時の状況（昭和28年6月26日）を示します。（写真1～6は、清光寺住職 江藤憲外氏から提供頂いたものです。）

**写真1** 巨瀬川の氾濫で川前橋が8時30分に流出しました。

**写真2** 札ノ辻から東側の上新町方面に向けて撮影した写真。  
膝上付近まで浸水していることがわかります。

**写真3** 災除川が氾濫して、消防団員が岩井橋に引っ掛かった流木を除去する作業をしています。  
橋の上部が見えるのみになっています。

**写真4** 美津留橋から北側に向かって撮影した写真。中央の家は現在の浮羽バイパス市役所東交差点付近と考えられます。

**写真5** 美津留橋から西側（江南村方面）に向かって撮影した写真。  
美津留川が完全に水没して海のようになっています。家屋も1階部分は完全に浸水しています。

**写真6** 写真5と同じ位置で撮影した写真で、添書には「流出寸前の水車に住む13人家族を救出に向かう決死作業」と記されています。

**写真7** 筑後川の氾濫で流失前の恵蘇宿橋。この写真はうきは市側から朝倉方面に向けて撮影したものです。

**写真8** 大石小学校の写真。添書には、「大石放水路堤防及び大石水道堰堤防決壊により流失寸前の大石小学校」と記されています。

写真1 巨瀬川に架かる川前橋流失



写真2 吉井町の札ノ辻付近



写真3 災除川に架かる岩井橋(流木撤去作業)



写真4 美津留橋から北に向けて撮影



写真5 美津留橋から江南村方面に向けて撮影



写真6 救出に向かう小舟(美津留橋から撮影)



写真7 恵蘇宿橋から朝倉方面に向けて撮影



写真8 大石小学校



# うきは市の災害の歴史

うきは市は、筑後川とその支流の巨瀬川、隈上川が流れ、毎年のように洪水に見舞われてきました。明治以降では、明治22年(1889)、大正10年(1921)、昭和28年(1953)に大規模な洪水で甚大な被害が出ています。また、南側に急峻な耳納山地があり、その山麓では、大規模な土石流災害が起こってきた歴史があります。多くの犠牲者を出した享保5年(1720)の大規模土石流災害をはじめとして、享和2年(1802)、嘉永4年(1851)、昭和21年(1946)、昭和28年(1953)にも被害をもたらしました。

これまで河川改修、ダムや砂防堰堤などの建設が進められ、過去に比べると災害は減っていますが、近年は災害が激甚化する傾向にあります。将来、更に地球温暖化が進むことを考えれば、想定を超える豪雨と災害の発生が懸念され、地域ぐるみで防災力を強化する取り組みを根気よく続けていく必要があります。下記に、うきは市に関連する災害の歴史(旱魃、火災を除く)を列挙しましたので、ご参考にして下さい。

災害発生年		内 容 (江戸時代は旧暦表記)
天武7年	679	筑紫地震: 日本書紀に記された筑紫地震。幅6m、長さ10kmの地割れが発生、家屋の多くが倒壊、マグニチュード6.5~7.5と推定されている。耳納断層帯の地震と考えられる。
天正6年	1573	5月大雨・洪水で家が流失し、多数の死者を出す。
慶長19年	1614	5月6日から7日にかけて、洪水13回に及ぶ。
寛永12年	1635	7月27日大暴風雨、この風、百年以来の大風になる。
万治元年	1658	8月大雨風で巨瀬川が氾濫して、人と馬が多く流される。
万治2年	1659	7月大雨巨瀬川大氾濫。堤防決壊で溝尻村20軒流出、大生寺で山崩れ、田畑荒廃する。
寛文7年	1667	3月22日の洪水で完成して間もない高田堰が破壊される。
寛文8年	1668	5月17日の大洪水で畑が被害を受ける。高田堰再度破壊される。
寛文9年	1669	8月11日の筑後川大洪水で上三郡の堤防が決壊し、田畑が荒廃、人畜に死傷が多かった。早田村が浸水する。その折、大石水道が破損したため、上郡の民衆が総出で修復を行った。
延宝元年	1673	5月17、18日、大雨で筑後川と巨瀬川洪水、土手が崩れて、多くの人と馬が漂流する。
延宝2年	1674	6月1日から4日まで大雨洪水で用水路が埋没する。
延宝4年	1676	5月8日大雨洪水、延宝元年よりも水位が高くなる。
天和3年	1683	閏5月17日洪水が発生し、生葉郡5つの村の16ヶ所で土手が切れる。
元禄4年	1691	6月阿蘇山爆発で雨の如く石降ってくる。
元禄6年	1693	1月22、23日、梅の大きさに匹敵する雹が降り、小鳥が死ぬ。
元禄8年	1695	2月1日、3月13日地震、14日に地震と大風が起こる。7月4日大雨で山汐洪水、瀬ノ下で水位が床上2丈(約6m)に達する。耳納山筋で山崩れ、巨瀬川で氾濫が起こる。
元禄9年	1696	1月地震多発。1月16、22日は大地震となる。
元禄13年	1700	1月1日大雨、前年から降り続いた雨で15日に洪水となる。2月26日に地震が起こる。
元禄15年	1702	5月から閏8月まで雨が続き、洪水大小32回起こる。久留米藩の損耗14万3千石。5月16~22日にかけて大雨で、5月20日に洪水となる。
宝永2年	1705	3月より年末まで地震が続く。閏3月4日地震、20日、4月1日、翌2日大地震。
宝永3年	1706	10月22、23、24日地震。
宝永4年	1707	10月4日夜半大地震が起こる。これは、東海・東南海・南海にあるプレートが同時に動いた南海トラフ大地震(宝永大地震)で、九州東部沿岸部で深刻な津波被害となる。その2ヶ月後に富士山が噴火する。この地震で所々被害があり、山辺の村で家が崩れ死者が出る。
宝永5年	1708	正月元日大風大雨、2月2日大雨洪水、4月3日の大雨は7日まで続き、洪水数度に及ぶ。
正徳元年	1711	5月に3回の洪水が発生する。
正徳3年	1713	7月13日大風で大木倒れる。柳川で高潮が発生し、堤防が決壊、349人の溺死者を出す。
享保2年	1717	6月1日大雨で耳納山が崩れ、巨瀬川筋で洪水が発生、吉井が浸水する。
享保3年	1718	8月大雨風で損害が出る。

災害発生年		内 容 (江戸時代は旧暦表記)
享保4年	1719	5月19、20日、宝永5年以来の洪水となる。
享保5年	1720	6月21日山汐洪水起こる。江戸時代筑後国で起こった最大の災害で、筑前博多、豊前小倉、肥前佐賀・基山、豊後日田も大きな被害となる。耳納山系では山崩れ7,737ヶ所、特に、屋形村、安富村、延寿寺村、妹川村の山汐(土石流)の被害が大きく、死者61人に達する。巨瀬川氾濫で溝尻村、朝田村など多くの村が浸水被害を受け、高橋神社が流出する。また、屋部村と流川村の境界に位置する深迫谷からの山汐が巨瀬川の氾濫を誘発し、大村全域が土砂で埋没する。
享保6年	1721	4月21日大雨大水。6月11日大雨洪水で巨瀬川が氾濫して田畑に泥砂が入り、大きな被害となった。
享保8年	1723	11月21日大地震(柳川地震)で瓦落ち、寺の石塔倒れる。
享保11年	1726	4月22日大雨洪水。5月20～22日大雨洪水で筑後川と巨瀬川が氾濫する。
享保14年	1729	8月19日大雨風。9月13日大風で大木倒れる。
享保17年	1732	5月6日より雨が降り続き、5月9日、5月26日に洪水となる。
享保19年	1734	5月24日から6月16日まで雨が降り続き、所々洪水となる。
元文3年	1738	5月と6月に2回の大雨洪水があり、長野水道が破損する。
寛保2年	1742	5月30日、6月1日大雨洪水、7月末まで洪水33回記録する。
寛保3年	1743	8月13日大風で吉井町含め4,500棟破損する。畑の被害も多かった。
延享2年	1745	7月5日大雨洪水で長野堰大破する。筑後川、巨瀬川、隈上川で洪水被害が起こる。
寛延3年	1750	5月4日、6月4、7日洪水、8月22日大風。
宝暦5年	1755	5月27日大雨洪水が起こり、生葉郡では山汐(土石流)の被害が出る。6月2日筑後川洪水、5日には最大で約5.4mの水嵩に達する。8月24日暴風雨によって藩内の被害が大きく、特に生葉、竹野、山本、上妻、下妻の被害が大きかった。溝尻村で1名死亡、浮羽島の逆杉が倒れる。
明和2年	1765	6月16日暴風を伴う大雨で筑後川、巨瀬川が氾濫する。瀬ノ下水位約6mを超えて、長野堰が大破する。
明和4年	1767	5月筑後川洪水、6月7日大雨で久留米城下が浸水(宮地 水位約6m)する。
明和6年	1769	6月7、8日の大雨洪水で吉井町一帯が浸水する。27日には巨瀬川が氾濫して堤防が決壊する。
安永元年	1772	6月18日暴風雨で筑後川、巨瀬川大洪水。
安永5年	1776	4月14日大雨洪水で巨瀬川が氾濫する。溝筋(側溝・水路)が破損する。5月24日享保5年以来の大洪水で柳野川(隈上川)の氾濫が甚だしかった。また、筑後川の氾濫もあり、長野水道が越水、洗堀が起こったが、土俵を積んで応急措置をした結果、何とか堤防の大破を防いでいる。
安永6年	1777	7月25日暴風雨で巨瀬川が氾濫する。
安永8年	1779	8月3日より大雨、5、6日筑後川、巨瀬川洪水。久留米城下は浸水して、水嵩約3m上がる。
安永9年	1780	5月30日暴風雨で巨瀬川が氾濫し、吉井とその近隣で浸水被害が起こる。
天明4年	1784	5月26日筑後川大洪水、小江村で水位約6.3mに達する。
天明8年	1788	6月3日巨瀬川が大氾濫して吉井町が浸水する。筑後川でも大洪水が起こり、堤防が所々破損する。
寛政3年	1791	6月12日筑後川と巨瀬川が大氾濫して、吉井町とその近隣が浸水する。
寛政6年	1794	4月11日増水中に大石水道番人の諫山金吾さんが作業中に不慮の事故で死亡する。
寛政7年	1795	数日間降雨が続き、5月26日大雨で筑後川、柳野川(隈上川)が大洪水。大石堰所々破損する。
寛政8年	1796	5、6月筑後川、巨瀬川、隈上川の洪水で各所が破損、星野山で山潮(土石流)が発生する。
享和2年	1802	5月25日大雨、耳納山麓の上・中・下泉村から流川村まで数十ヶ所で山が抜ける(※塩足村庄屋記録)。特に、安富村と屋形村では死者がなかったものの享保5年以来の被害となる。6月1日、巨瀬川、小塩川で洪水が起こり、吉井町が浸水する。
文化元年	1804	5月15日筑後川洪水。8月29日大風で潰家多く、風が止んだ後の大雨洪水で吉井町が浸水する。
文化7年	1810	5月20日巨瀬川の洪水で作物の被害が多かった。
文化11年	1814	7月14～16日大雨洪水で巨瀬川氾濫し、吉井町が浸水する。
文化12年	1815	7月10日筑後川と巨瀬川が氾濫し、吉井町が浸水する。
文化13年	1816	6月15日洪水で、筑後川、巨瀬川、隈上川で被害が出る。
文政5年	1822	5月18日巨瀬川大洪水。6月も巨瀬川大氾濫で堤防決壊し、吉井町とその周辺が浸水する。
文政11年	1828	7月2日大風、その後5日まで洪水が起こり、筑後川、巨瀬川、隈上川で被害が出る。8月9日、シーボルト台風による高潮で佐賀、博多は大きな被害となる。佐賀藩領だけで死者が一万人に達する。浮羽郡では、死者13人、潰家233棟の被害が出る。

災害発生年		内 容（江戸時代は旧暦表記、明治時代以降は新暦表記）
天保7年	1836	6～7月度々洪水となり、山崩も起きる。8月には冷気が入り、米が実らず不作となる。妹川、新川、田籠、小塩、星野の各村に拝借米（返済義務あり）が配布される。
天保8年	1837	1月大雨で麦生村山崩れが起こる。4月に雹が降り、大きい雹は茶碗ほど、小さい雹は梅干しほどであった。8月12日大雨洪水になる。
天保9年	1838	筑前・筑後で6月27日より大雨、28日筑後川筋で大洪水。生葉、竹野、山本郡で人家流出。
天保11年	1840	6月筑前、豊前大洪水、宝満山の山汐で15名死亡。6月4、5日巨瀬川増水で吉井町が浸水する。
天保14年	1843	9月3日大風。肥前・筑後の被害が大きく、台風による高潮が久留米瀬ノ下まで上り大騒動となる。
嘉永3年	1850	6月1日大雨で筑前怡土郡、鞍手郡の山汐で多くの死者が出る。筑後も12日まで水が引かず、苗が腐ったとの噂があることを博多の豪商が記している（加瀬家記録）。豊後夜明（祝原村）で大肥川と筑後川の合流地点の歌詠橋が流出する（※広瀬淡窓日記）。8月7日台風上三郡で被害。
嘉永4年	1851	6月29日大暴風雨で巨瀬川が氾濫、堤防が決壊して吉井町が浸水する。耳納山筋で山汐発生。
安政元年	1854	11月5日安政南海地震（震源：四国沖）、7日も豊予海峡地震（M7.4）が起こる。筑後は諸国に比べて被害は軽く、家が倒れることはなかったが大きく揺れる。九州では豊後で大きな被害が出る。
安政5年	1858	5月23日筑後川氾濫、6月29日暴風雨で樹木を倒す。
安政6年	1859	6月4日洪水で長野仮橋が流失する。また、巨瀬川も大洪水、吉井町とその周辺が浸水する。
萬延元年	1860	4月8、9日筑後川洪水で長野水門破損し、吉井が浸水する。水が長野水道堤防上の道を越流して、石垣崩落する。また、5月15日大生寺で江戸時代3度目の山汐が発生する。6月10日大風。
慶応元年	1865	5月10日筑後川洪水で大石仮堰が損壊する。
慶応2年	1866	6月3日大暴風雨で筑後川氾濫、久留米城下が浸水する。また巨瀬川氾濫で吉井町が浸水する。
明治17年	1884	7月17日筑後川、巨瀬川で洪水。9月17日の台風で大生寺の本堂が倒れる。
明治18年	1885	6月18日筑後川稀なる大洪水。被害地域は広範囲で筑後川周辺の村々に及ぶ。この時、千年村で約7.5mの水位に達し、多くの家屋が浸水する。船越村も同様の被害となる。
明治22年	1889	7月5日未曾有の洪水となり、瀬ノ下と角間で約8.4mの水位に達する。筑後川周辺の被害は、死者52人、家屋流失1,263棟、家屋破損8,207棟、浸水家屋26,238棟に達する。現在のうきは市では、角間堤防が決壊し、船越村と千年村で大きな浸水被害となる。また、巨瀬川の氾濫で、耳納山麓を除き、濁流が襲って一面泥海と化した。 <b>筑後川三大水害</b>
明治33年	1900	7月16日、巨瀬川の氾濫で多くの橋梁が流失する。
大正2年	1913	4月25日大雨洪水で巨瀬川の堤防が決壊し、吉井町で131棟の浸水被害が出る。
大正10年	1921	6月17日筑後川洪水で、浮羽郡では家屋・橋梁流失、堤防決壊等の被害が多く出る。 <b>筑後川三大水害</b>
大正11年	1921	7月2～4日大雨洪水。吉井町で141棟の浸水被害、道路・堤防の損壊などの被害が出る。
昭和6年	1931	7月17日巨瀬川の氾濫で堤防決壊し、多くの家屋が流され、吉井町の浸水被害は100棟に及ぶ。
昭和10年	1935	7月15日の大雨で巨瀬川が氾濫して、浮羽郡で多くの浸水被害を出す。
昭和13年	1938	6月12～14日大雨、筑後川洪水、吉井町で床上浸水17棟、床下浸水207棟、堤防決壊17箇所。
昭和16年	1941	6月25～28日大雨、筑後川洪水、吉井町で床下浸水558棟、堤防決壊5箇所。
昭和21年	1946	7月8日大雨で巨瀬川が氾濫し、朝田村などの村々が浸水、屋形地区で土石流が発生する。
昭和28年	1953	西日本大水害：6月25日午後から雨が酷くなり、27日にかけて降り続き、筑後川とその支流の隈上川、巨瀬川などが氾濫し、橋梁（恵蘇大橋など）、民家を押し流し、至る所で堤防が決壊する。その影響で吉井町、浮羽町の低地部が浸水する。中でも、筑後川の中州、中島畑（現在のスポーツアイランドがある地域）の上流部（船端集落）と下流部（中島集落）は壊滅的な被害となり、集落は消滅する。一方、耳納山麓でも、延寿寺を中心に土石流による被害が甚大であった。 <b>筑後川三大水害</b>
昭和34年	1959	7月6、7日大雨、吉井で2日間雨量が364mmに達し、巨瀬川、美津留川、災除川が氾濫する。
平成3年	1991	台風19号で家屋、果樹園の被害があった。耳納山地で風倒木が多く発生する。
平成7年	1995	5月1日大雨、筑後川の増水で久留米市の男性が死亡する。田主丸駅近くの線路の土砂が流出し、JR久大本線は終日運休する。安富地区で土石流が発生し、一部で床上床下浸水が起こる。
平成24年	2012	平成24年7月九州北部豪雨：梅雨前線が停滞して矢部川に沿って豪雨となり、八女市を中心に深刻な浸水被害となる。うきは市では、東部の田籠を中心に大きな災害（犠牲者1名）となり、田籠、小塩、鹿狩、つづらなど集落が孤立する事態となった。線状降水帯が矢部川、星野川に沿って東西に停滞したことが豪雨の原因である。

参考資料：吉井町誌第一巻（昭和52年）、吉井町誌第三巻（昭和56年）、福岡県災異史（福岡測候所、昭和11年）福岡県近世災異誌（平成4年）、国土交通省九州地方整備局HP、朝日新聞聞蔵ビジュアル

# 地域の災害伝承を受け継ぎ 将来の災害に備えましょう

現在、住民の皆様配布しているハザードマップやうきは市のホームページを見れば、土砂災害警戒区域、筑後川や巨瀬川の氾濫に伴う浸水域・浸水深が示されており、自宅、職場、通勤・通学経路の災害の危険性を簡単に確認することができます。一方で、それらの情報だけでは、危険なことがわかっていても、具体的に何が起こるのかイメージできないことがあると思います。

そこで力を発揮するのが、石碑、災害時の写真、古文書などの過去の災害記録です。これらの記録は被災状況や住民の苦勞などを教えてくれます。災害時の写真は、今後起こると想定される災害で何が起こるのか、どのように対処するべきなのかについてヒントを与えてくれます。今回紹介した昭和28年大水害の写真は、昭和28年浮羽郡水害誌に掲載されており、地域別に写真とともに被害状況が詳しく述べられています。うきは市立図書館の郷土資料コーナーにあるので、ぜひご覧ください。今回は取り上げませんでしたが、災害の経験者の証言を記録して後世に残すことが重要です。これは説得力のある情報になります。地域ぐるみで証言を記録するとともに、地域特有の災害を学び、今後の防災に役立てましょう。

## 今回「ひかり拓本」の技術により撮影した記念碑

本冊子で紹介した石碑

- ・山潮記念碑(吉井町西屋形)
- ・大村復興碑(吉井町大村天満宮内)
- ・水害復興碑(吉井町江南至誠館内)
- ・大水害記念碑(浮羽町朝田天満宮内)
- ・笹尾地蔵尊(浮羽町笹尾稻荷大明神内)
- ・三堰碑(浮羽町高見 水神社内)
- ・妹川六地藏：・合瀬耳納峠地藏尊(浮羽町合瀬耳納峠)  
・牛鳴峠地藏尊(浮羽町歴史資料館内)
- ・田栄神社：・袋野匿溝記  
・神社改築水路復旧記念碑
- ・篠原泰之進の建立した記念碑(浮羽町高見)
- ・昭和一ノ瀬水道之碑(浮羽町一ノ瀬神社内)
- ・儲穀の碑(吉井町東屋形)
- ・水害復興碑(吉井町中島)

## 大事な命が失われる前に

- ・行政は万能ではありません。
- ・行政が一人ひとりを助けに行くことは出来ません。
- ・自分の命は自分で守りましょう。
- ・過去の災害情報をもとに災害をイメージし、危機感を持ちましょう。
- ・ハザードマップをもとに危険性を認識しましょう。
- ・家族、地域で平時から安全な避難場所を確認しておきましょう。
- ・高齢者は警戒レベル3で避難、警戒レベル4で全員避難。

